



第467号
2026年01月
bestopia.jp

パリ通信
第169号

日本の近現代史 1

明治維新への道

はじめに

今は誰でも知っていることですが、1945年（昭和20年）の日本人の平均寿命は男子23.9歳、女子37.5歳でした。明らかに戦争の結果です。近代の戦争は国民総力戦ですから徴兵制になります。徴兵されるのは老人ではありません。日本の人口減少の中でも深刻なのは生産労働者人口（15歳から64歳）です。最初に徴兵されるのは、この人達です。兵器の近代化で機械による戦争になると言われますが、ウクライナ、ガザの現状を見ても多くの人が戦死しています。2024年の日本人の平均寿命は男子81.09歳、女子87.13歳です。ロシアの男性は68.04歳です。

我が国は80年間戦争をしていません。それは戦争放棄の憲法に守られたからです。その憲法下であっても防衛費は増え続けて1987年にGDPの1%枠を突破して、2025年度では高市政権下で前倒しされ、防衛関連予算（防衛省予算+ α ）がGDP比2%に達する11兆円規模となりました。この金額は世界でもベスト10に入ります。（現時点での単純比較では米国、中国に次いで3位になります。）繰り返しますが、今の憲法下でもこれだけの防衛費が予算化されています。

昨年の後半から日本の動きに何らかの兆候のような変化を感じ、日本の近現代史を復習したくなりました。10年前、孫たちが高校生の頃に同じ試みを行いベストピア342号から362号に掲載しましたが、もう一度若い方に訴えたくくなりました。それは義務教育だけでなく高等学校でも近現代史は授業では時間切れということで省略されることが多かった。戦争するとどういうことになるのか。人間はなぜ戦争をするのかを知るには歴史の学びは欠かせないと思います。戦争をストップさせる一番大きな力は世論です。世論が賢くなければ戦争に巻き込まれてしまう危険があります。人間はなぜ戦争をするのか。戦争をするとうなるのか等一緒に考えて見ることが本稿の目的です。

衆議院が解散されるようです。目的は何でしょうか。現在の連立政権で一致していることは何でしょうか。2万円をばら撒いて国民の人気をとることができるのが政府です。政治家は忙しくて歴史の勉強はできないようです。

今月から500号を目指して、事実を極め、ポピュリズムに翻弄されることなく、二度と戦争をしないと誓った日本国を誇りにしたいと願いつつ学びを再開します。もとより私は学

者ではありません。普通の市民です。その強みを存分に生かして、85歳の自分に理解でき納得できるように進めていくことにします。

昨年10月から12月には日本国憲法の成立過程を詳しく学びました。それも歴史を見直そうと思うきっかけになっています。（ベストピア2025年10月～12月号参照）

それでは、始めます。

近現代史の始まりをいつにするかの学問的な定義には参加しない。

19世紀後半（日本では幕末から明治維新まで）から始まった第二次産業革命（エネルギーが石炭から石油に変わった）によって生活必需品が大量に生産され国内で消化できなくなった。この余剰生産物を海外（特に後進国）に売りつける必要が生じて、開国を迫ったり、植民地化しようとする動きが始まった時代から始める。帝国主義（他国を侵略する）時代の始まりにほぼ相応する。

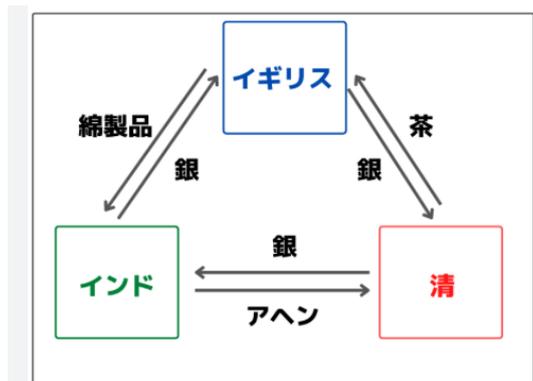
1、はじめにアヘン戦争あり。1840年から1841年

これはイギリスと清国の戦争で日本に直接関係がないが、ロシアの南下政策をめぐって日本と清国及び朝鮮国との支配関係に複雑に絡み合ってくる。その前夜の事件として理解することが重要である。又、帝国主義の始まりにも位置する事件である。

(1)アヘン戦争の遠因を遡ると日本のお茶にたどり着く。

日本のお茶がオランダに紹介されたのは1596年、初めは薬用として考えられていた。中国からイギリスにお茶が紹介されたのは1637年、1662年にはイギリス王宮で盛んに用いられたことによって大普及して紅茶ブームが起きた。（今のアフタヌーンティーはイギリスの習慣から伝わった）

イギリスはお茶を清国から輸入し、その決済は銀であった。清国がイギリスから買うものは少なかった（イギリスで余剰製品となるものは清国では必要なかった）のでイギリスは銀の流失が過多になり国内経済に影響した。そこでイギリスは、1600年に作られた東インド会社を利用して三角貿易を考え出した。ここでアヘンが出てくる。（左図から銀がイギリスに還流していることを確認する。）



アヘンも元々は麻酔薬として用いられていた。清国の経世が乱れており、極貧の人たちに（死に至る）麻薬として密かに使用されていた。それに目をつけたイギリス政府が東インド会社にケシの栽培を命じてアヘンを大量に作り清国へ密輸し始めた。

イギリスの手によって密輸入されるアヘンの害（国民の健康、治安の乱れ、退廃状況）が広がり、（東インド会社への）銀の流出も増大しているところから、1839年、清朝政府

は林則徐を特命大臣に任命して広東に派遣した。赴任した林則徐は、吸飲者・販売者への死刑の執行を宣言し、イギリス商人に対し期限付きでアヘンの引き渡しを要求した。それが履行されないので貿易停止、商館閉鎖の強硬手段に出て、アヘン2万箱を押収し、焼却した。同じ時、イギリス人水兵による中国人殺害事件が起こり、林則徐は犯人引き渡しを要求したが、イギリスは応じず、アヘンの焼却に対する賠償を清国に要求した。

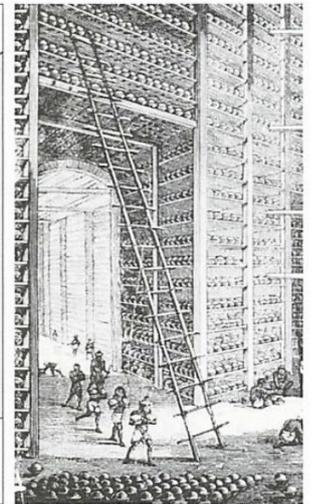
近代におけるヨーロッパを主導する国イギリスとアジアの大国（冊報制度をとり事実上鎖国政策を継続している）が始めて戦火を交えた戦争となった。（侵略戦争の何ものでもない）この戦争の軍隊派遣についてはイギリスは議会の承認が必要であった。賛成派が僅差（賛成271、反対262、9票の僅差）で勝利した。アヘンを他国の人に売りつけ、その人々の人生を蝕み死に至らせることを議会が承認したのである。近代資本主義国家の模範である紳士の国、イギリスの驚愕の一面をここに見る。余談ながら僅差で思わぬ方向に舵が切られる時、経世は穏やかではないことを現在でも実感する。最近のイギリスのEU脱退も僅差であった。

(2)南京条約1842年8月29日

- ①清が領事裁判権を認め、関税自主権を失った不平等条約。
 - ②広州、福州、厦門、寧波、上海の5つの港を開港する。
 - ③香港島を割譲される。
 - ④賠償金の支払い2,100万テール。
- 最初の600万テール支払いが終わるまでイギリスは南京を封鎖した。



▲19世紀半ばの中国



▲インドのアヘン倉庫

2、アロー号事件（第二次アヘン戦争）

(1)1856年10月、イギリス、更に清国を攻める。

アヘン戦争の結果として南京条約を締結し、清国との自由貿易が形の上ではじまったが、イギリスは、取引が上海などの5港だけに限定され、特に首都の北京での清国政府との交渉が出来ないことなど、自由貿易としては不十分であるという不満が強まっていた。

時に清国では1851年から1864年まで13年間続いた「太平天国の乱」で国内は大混乱をしていた。（クーデターが起こり一時南京に独立国家が存在していた）

このようなときを好機としてアロー号事件を口実に、イギリスはフランスとともに、開港場の拡大、北京への領事の常駐などを要求し、再び清国政府に対する軍事行動を起こした。この戦争の調停役にロシアが入った。

アロー号事件

1856年10月、広州港に停泊中だったアヘン密輸船のアロー号に対して、清国官憲は海賊の容疑で立ち入り検査を行い、船員を逮捕し、イギリス国旗を引きずり下ろした。それをイギリスへの侮辱であるとして抗議し、フランス軍と共同して戦火の火蓋を切った。

(2)1858年天津条約と1860年北京条約

この事件の結末は複雑である。

まず、調停役をかってロシアが終結の仲介に加わったが、条約は2回に分かれた。

第1回目 1858年天津条約

- ①賠償金、イギリスとフランスに各200万テール（両銀）
- ②各国外交官の北京駐在の承認 清国は外国交渉の窓口、総理各国事務衛門を設置。
- ③南京等10港の開港、アヘン取引の合法化
- ④外国人の内地旅行権・外国船舶の内河航行権の承認
- ⑤キリスト教布教の自由の承認。
- ⑥ロシアは清国と単独で愛渾条約を締結（仲介の代償） アムール川を国境とし、その北側をロシア領と確定した。

批准書交換のために上陸したイギリスに対して発砲事件が起きたことによって、武力衝突が再燃した。清国は更に被害を拡大した。

第2回目の条約は北京条約で1860年に締結され批准された。

それぞれの条約の内容は次の通りである。

いずれも、締結国 イギリス、フランス、アメリカ、仲介国ロシア

第2回目 1860年北京条約

- ①賠償金の増額、イギリスとフランスに各600万テール（両銀）
- ②イギリスへの九竜半島南部割譲
- ③天津の開港
- ④ロシアは清国・沿海州（外蒙古）を領有
アムール川とウスリー川の東側（日本海に面した地域）
ウラジオストーク（東方を征服せよという意味の地名）に要塞都市を建設



私見

- 1、イギリス議会在アヘン戦争を承認することにより、清国侵略を正当化する動きが始まり、国土の割譲、租借、不平等条約の強要によって、清国への進出が始まった。
- 2、このようにアヘン戦争は帝国主義国の侵略戦争の始まりであり、当該国の利害に留まらず、戦場から離れたロシアや日本にも影響を与えることになった。
徳川幕府に開国と国防の必要性を知らしめることになった。

3、清国は多額の賠償金を支払うために徴税の強化をした。内政混乱の中で政権は腐敗して農民が困窮する。度重なる政変と農民一揆によって国土は疲弊して外圧を受けやすくなっていった。

4、この原稿を書き終わる頃、2026年1月4日、トランプ大統領がベネズエラの大統領を拉致したというニュースが入ってきた。麻薬と石油が絡んだ帝国主義の復活の様相を呈する事件である。歴史が2世紀ほど逆戻りしたようだ。

5、ロシアはこの戦争を調停するという名目で、戦わずして南下政策を猛進した。

3、日本とロシアとの関係 17世紀末から1875年まで

不凍港を持たないロシアは南下政策をとり領土拡大を狙う。

その始まりはロマノフ王朝ピョートル一世（1682-1725）である。

ロシアの南下政策は三方向に展開された

①東アジア方面――シベリアを東進してアムール川流域、沿海州、満州、朝鮮

最初の南下はピョートル I 世時代1689年、清国に向かう。ネルチンクス条約で国境協定

②黒海・バルカン半島方面――黒海の制海権を握る。クリミア半島を狙う

1853年-56年、クリミア戦争で敗北、相手はオスマン帝国、イギリス、フランス

2014年3月、ロシアはクリミア半島を併合、

現在半島への陸路を確保すべくウクライナと交戦中。

③中央アジア方面――カスピ海を超えインド方面（イギリスの支配領域）

エカチェリーナ2世（女帝、在位1762-96）は18世紀後半のロシアを強大化させ、オスマン帝国と戦いクリミア半島を獲得した。しかし、1853年-56年、オスマン帝国、イギリス、フランスとのクリミア戦争で敗北、クリミア半島を失う。

時代が遡るので注意してください。

ロシアとの関係は四島問題で今も課題になっています。

(1)ピョートル一世と日本の関係

①ピョートル一世(1672-1725)は西欧を視察し、自ら造船所で働き技術や文化及び制度を学び、ロシアを近代化して、東方の辺境国家から西欧列強の一員へと変貌させた皇帝。1700-1721年の長いスエーデンとの戦争（大北方戦争）で勝利しバルト海を制覇し、サンクトペテルグの要塞都市を建設し首都とした。

②ピョートルと日本の関わり

17世紀まで、ロシアでは日本についてほとんど知られていなかった。ピョートルはヨーロッパ歴訪中、オランダに滞在したとき、アムステルダム市の市長から日本の話を聞き、日本の地図を手に入れた。日本の北部がどうなっているかわからなかった。日本が磁器や漆器を産出する高度な文明国であると知ったピョートルは、ロシアと日本の北辺がどこで接近しているかきぐるうとした。

1697-99年、コサックの隊長ウラジーミル=アトラソフに探検を命じた。
カムチャツカを探検したアトラソフは、現地で原住民の捕虜となっていた日本人に出会った。

デンベイ(伝兵衛)と言うこの日本人は、1695(元禄8)年、大坂から米、酒などを積んで江戸にむかう途中に難破し、6ヶ月も漂流してカムチャツカ南部にたどり着いた。
アトラソフは伝兵衛をモスクワに連れて行ってシベリア庁に報告した。これを聞いたピョートルは、自ら伝兵衛に会い、日本の話を聞いてその文明の高さに興味を持ち、ロシア語の習得と日本語をロシアの青年に教えることを命じた。

1705年には勅令を出して数名の青年に伝兵衛について日本語を学ぶように命じ、同時に日本との通商を開くことも掲げた。

伝兵衛は帰国を望んだが許されなかった。しかし伝兵衛が死んだら日本語教育ができなくなるので、日本の漂流民を発見するようにシベリア庁に命令を出したところ、1710年にサニマ(三右衛門?)と呼ばれた日本人がカムチャツカに漂着し、ペテルブルクに送られてきて、彼は伝兵衛の助手となった。

1729年には薩摩から大阪に向かう途中で遭難した若潮丸がカムチャツカに漂着した。17人の乗組員はほとんどが現地のコサックに殺され、ソーザとゴンザの二人だけが生き残った。この時はピョートルはすでに死んで女帝アンナの時代になっていたが、二人は女帝に謁見して洗礼を受けロシア名を名乗った。

女帝アンナ、日本語学校を開設、1735年、二人は日本語を教える命令を受け、翌年ペテルブルクの科学アカデミーに日本語学校が開設された。ゴンザは日本語を習得した科学アカデミーのアンドレイ=ボグダーノフに協力して、露日辞典や日本語会話の本を編纂した。世界で最初の露日辞典は、ゴンザの出身地である薩摩訛りで書かれていた。ゴンザは間もなく21歳の若さで亡くなったが、二人のデスマスクは今もペテルブルクの人類学・民族学博物館に保存されている<外川継男『ロシアとソ連』講談社学術文庫 145-149>

(2)エカチェリーナ2世(1764~1796)時代のロシアと日本の関係

1778年、江戸時代(田沼意次時代)ロシア船が蝦夷の厚岸にきて、松前藩に通商を要求してきた。日本はロシアの接近に悩み始め、蝦夷地探検が始まった。

1779年、国後島のアイヌ人が過酷な労働に反発して蜂起した。松前藩はこれを鎮圧するが、蜂起にはロシアが関係していた疑いをもった。ロシアへの恐怖が高まった

1785年、田沼は最上徳内らに蝦夷地調査を命じる。

最上徳内の調査は1791年択捉島に至る

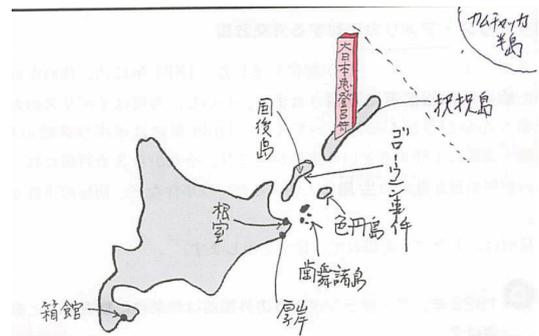
1792年、ロシア使節ラクスマンが根室に来航、通商を求める。

ラクスマンは、難破してロシアに救助された伊勢の船乗り大黒屋光太夫を送還するという名目でやってきた。幕府は困って「改めてこの長崎入港許可証を持って長崎に来てくれ」といって追い返した。(1793年)

1798年、日本は択捉島に大日本恵登呂府の標柱を建てる。

択捉島にはロシア人がやってきてアイヌとの交易の場になっていた。

ロシアの支配を恐れた幕府は択捉島までは日本の領地であると考え、択捉島とフルップ島の間境界線を引いた。



1799年、幕府、東蝦夷地直轄する。八王子千人同心（警察業務従事者）100人を蝦夷地に

入植さアイヌ人の同化政策の準備に入った。

1800年、伊能忠敬、蝦夷地測量に出発

1804年、ロシア人レザノフは、長崎入港許可証（1793年）をもって来航、通商を要求してきた。

1805年、半年間幽閉状態で交渉してきたがレザノフの要求は拒否され、彼は激怒して帰った。

1806年、文化露寇事件、

レザノフの復讐でロシア海軍軍人が樺太、択捉島、利尻島を襲撃した。

1807年、松前藩は西蝦夷地も直轄として、全蝦夷地を直轄として、松前奉行を置き、東北諸藩に警備にあたらせた。

1808年、間宮林蔵が樺太へ探検、調査し樺太が島であることを発見した。

1811年、グローニン事件、測量中のロシア軍艦の船長を国後島で幕府側が捕えた。

ロシアは高田屋嘉兵衛という商人を捕まえた。嘉兵衛は交渉して捕虜交換のようにして治った。このように江戸幕府もロシアの南下には苦しめられていた。

1853年、前年アメリカのペリーが浦賀に来航して来た
と聞いたロシアは、使節プチャーチンが長崎に来航して
開国と国境の確定を要求してきた。

1855年、下田で日露和親条約を締結し国境を明確にした。（地図）

条約の内容、①択捉島は全島日本に属し、ウルップ全島より北の千島列島はロシアの領土である。②樺太は従来通り両国民が入り混じって住むことにする。

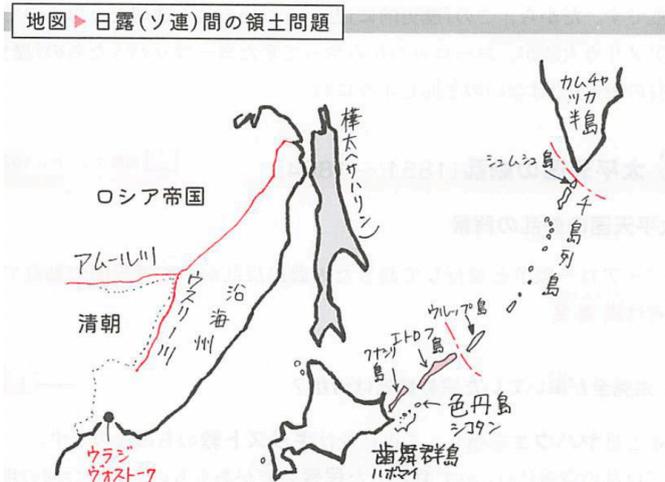
（両国雑居）

③日本は下田、箱館に加えて長崎も開港する。

北方問題では千島列島の範囲が一つの争点になっている。日本は歯舞・色丹は含まないと主張している。それはこの条約の有効性をもって吉田茂がサンフランシスコ講和会議でも主張した。なお、吉田は国後・択捉のソビエトによる収用を一方的と非難している。東京大学名誉教授・和田春樹は千島列島の呼称は日本語であり、ロシア語ではクリル諸島という。クリル諸島には4島が含まれる。ロシアの主張となっている。条約上での言葉と概念の違いが原因のようだ。条約の締結の仕方は言語だけでなく地図を用いるべきであったと思う。



1860年、アロー戦争の仲介で北京条約が締結されたときロシアは清国・沿海州（外蒙古）を領有した。（アムール川とウスリー川の東側）



ウラジオストーク（東方を征服せよという意味の地名）に要塞都市を建設開始した。

不凍港の獲得と極東拠点の建設を始める。清国との愛渾条約で曖昧になっていた沿海州を領有して、日本と清国への圧力を強める。

北京条約でロシアが沿海州を獲得したことによって、ロシアと朝鮮が国境を接するようになった。

ロシア領はウラジヴオストークより南、豆満江（トマン江）をはさんで朝鮮王朝と接することになった。ロシアは満州進出と共に、ウラジヴオストークよりもさらに南方に完全な不凍港を獲得したいという領土的野心を持ち、朝鮮王朝に対しても圧力を加えるようになる。それが朝鮮半島をめぐる、清・ロシア・日本の三国の対立という19世紀末以降の東アジアの国際情勢である。

1875年、樺太千島交換条約

日本は樺太（両国雑居地）を維持することをやめて千島列島と交換する。樺太は完全にロシア領土となる。

千島列島が日本の領土となる、宗谷海峡は日本に帰属する。津軽海峡は狭くて船の航行は難しい、対馬海峡だけがロシアが太平洋にでられることになり、ロシアには不満が残る。いずれ太平洋に出る道を模索していた。



この年の9月に朝鮮では江華島事件が起きる。日本が朝鮮に不平等条約を押しつけた。

ロシアは東アジア経由で南下する以前の1871年、清国のイリ地方（現在の新疆ウイグル自治区）を占拠していたが1881年にその一部を返還と引き換えに国境を確定し、貿易的特許権をとり、更に賠償金の支払いをさせた。不平等条約を結ばせた。清国は中央アジアではロシアの南下を認めた。

4、日本の開国への道

(1)1842年 天保の薪水給与令

アヘン戦争で清がイギリスに敗れた情報が伝わり、幕府は武力衝突を避けられない状況に危機感を抱き、外国船が来航した際に、燃料(薪)や水、食料を与えて速やかに退去させることを命じる(避戦政策)。1825年に出した「異国船打払令」(鎖国政策)の緩和をした。対外政策の変換をした第一歩となる。オランダはこの年にアメリカのペリー到来を予告してくれていた。

(2)諸外国の接近

①1844年、オランダから開国勧告

「蒸気船が登場して以来国と国との距離は一挙に近くなった。鎖国を続けると世界の人々から嫌われてしまいますよ。開国を勧めます。」という内容だが幕府は拒否した。

②1846年、アメリカ使節ビッドル、浦賀に来航。幕府は伊豆韮山に反射炉着工。

③1853年、ペリーが軍艦4隻を率いて浦賀に来航。将軍は12代家慶。

ペリーは長崎へは行かず江戸湾を北上して海域を測量する。(いずれ攻めますよ)

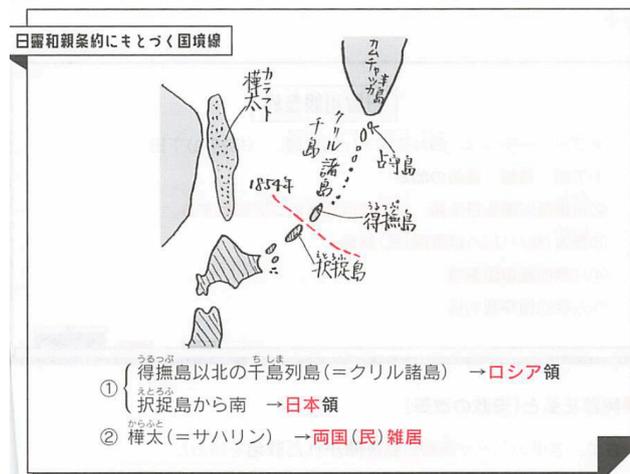
強引に押し切られて久里浜で幕府はペリーと会見し、和親と通商を求めるアメリカ側の国書を受け取る。

④1853年、アメリカに遅れてはならないとロシア使節プチャーチンが長崎に軍艦7隻を率いて来航。ロシアの来航は1792年にラクスマンが、1804年にレザノフがやってきている。レザノフは幽閉状態で日本に6ヶ月滞在して、日本の返事を待ったが日本は通商を拒否した。レザノフは激怒した。その報復として1806年には樺太の松前藩居留地を襲撃し、その後、択捉島駐留の幕府軍を攻撃した。しかし、これらの軍事行動はロシア皇帝の許可を得ておらず、不快感を示したロシア皇帝は、1808年全軍に撤退を命令した。(文化露寇)

⑤1854年、日米和親条約、下田、箱館の開港(薪水、食料、石炭供給)と外交官の駐在(片務的最恵国待遇)

⑥1854年、日露和親条約、北方領土国境に関する事。初めての国境協定。両国の国境は^{えとろぶ}択捉島とウルップ島との間に決定する。択捉島から南側はすべて日本領であり、ウルップ島より北の千島列島はロシア領である。樺太は両国の国境線を決めず、従来通り両国民が混じって住むこととする。(雑居地)

(地図出典 実況日本史探究 3p163)



1856年、アメリカ総領事館ハリス着任

1857年、アロー号事件(前記)

1858年、日米修好通商条約、関税自主権なし、領事裁判権なしと不平等条約である。この年、ロシア、イギリス、オランダ、フランスとも同様の条約を結ぶ。

これらの条約は大老・井伊直弼が天皇の許可なく（無勅許）調印した。

1858年、安政の大獄

修好通商条約の調印に反対した尊皇攘夷派の公家・大名・思想家を、大老井伊直弼は厳しく弾圧した。吉田松陰もその対象で1859年処刑された。

この過激な処罰に加えて、不平等条約は国内に強烈なインフレを招く、物価高は庶民を苦しめ反幕府、尊王攘夷派（天皇を尊び、外国を打ち払う、清国の華夷思想に似るところがある）を刺激する。

1860年、桜田門外ノ変

井伊直弼は尊王攘夷派の水戸浪士によって殺害された。

1861年3月14日、ロシア軍艦（ポサドニック号）対馬不法占領事件

①ロシアの目的は不凍港を確保し、対馬を軍事拠点とする南下政策の一環で対馬の芋崎を半年にわたり占拠した。

②「船体修理」を名目に芋崎に停泊、兵舎建設や練兵場の設営をはじめ建設資材の要求、島民は湾内で測量中のロシア兵に対し石を投げて抵抗した。ロシアは発砲し死傷者が出る

③兵力に格段の開きがあり、ロシアの横暴は食糧・薪炭・木材・牛馬に加えて遊女を要求、山を測量する時には婦女を追いかける水兵もいたという。

④3月23日、ロシアは対馬藩に租借を要求してきた。

⑤4月12日、ロシア兵が小型の艦艇に乗り大船越の水門を通過しようとしたのを対馬藩の警備兵が制止すると、ロシア兵は彼を射殺し、番所を襲撃して武器を強奪し、数人の島民を拉致7頭の牛を奪って帰船した。

⑥幕府はイギリスに援助を依頼する。1861年8月28日、イギリス東洋艦隊の軍艦2隻が対馬に到着、示威行動でロシアに圧力をかけた。ロシアは戦力の差に劣るとし、9月19日ポサドニック号は対馬から退去した。イギリスはロシアが南下して来ることに脅威を覚えて日本を援助した。（ロシアを放置ればイギリスの東アジア政策が脅かされると危惧していた。一説にはイギリスは対馬を占領したかったとの意見もあるが、イギリスの侵略政策は領地を持たないことに徹底している）



1862年2月11日 公武合体の実行

井伊直弼の死後、弱体化した幕府が朝廷の権威を借りて体制を立て直そうとしたのが公武合体、老中安藤信正が考えた。

孝明天皇の妹・和宮を徳川家（14代家茂）の嫁にした（これで攘夷派（開国反対派）は政略結婚だと言って激化する

1862年2月13日 坂下門外の変、
安藤信正を襲われる。命拾いはするが失権した。

1862年4月23日、寺田屋騒動、（薩摩藩内の統一を狙った）

公武合体を進めようとする薩摩藩の島津久光は同藩の反対派が集まっていた京都の寺田屋旅館にいる武士たちを一掃するために強靱な同藩の武士を送り込み殺害した。公武合体で薩摩藩は公武合体の方針を藩内統一した。（攘夷を廃止するものではないことに注意、開国派であった薩摩藩の方針が変わっているが、開国を禁ずることでもない。天皇の支配のもとで開国するとい姿勢）

その後天皇の使者として江戸に向かい将軍に幕政改革を進言し文久の改革を行った。安政の大獄で弾圧された一橋家を復帰させた。一橋慶喜が将軍後見人になった。

1862年8月21日、生麦事件

島津久光が江戸から薩摩に戻る途中、神奈川の生麦で久光の行列にイギリス人4名が横切った。これを薩摩藩士が切付け1名が死亡、2名が負傷した。イギリスからの賠償と犯人引渡しを拒否したことにより薩英戦争のきっかけとなった。

1863年5月10日、長州藩攘夷を決行

孝明天皇の「攘夷決行の勅命」を受け、長州藩が尊王攘夷思想（条約破棄を目的）により下関海峡を通過するアメリカ船を砲撃したことで始まる。その後もフランス、オランダ船を砲撃して海上封鎖を行った。（結末は翌年）長州藩は翌年1864年8月まで戦闘が続くので軍を下関に集結していた。

1863年8月15日、薩英戦争

生麦事件の報復でイギリスが薩摩を攻撃する。鹿児島城下の1割が焼失、砲台や弾薬庫に損害を受ける。イギリス側も戦艦が大破して艦長ら13人が死亡する等の被害が出た。講和談判の中で薩摩藩は「イギリスの軍艦や武器を買いたい、留学生を派遣したい」と依頼したことによって親密な関係になって終結した。（薩摩とイギリスの関係は親密になる）
薩摩藩はイギリス軍の圧倒的な軍事力を痛感し「攘夷は不可能」と悟る。

1863年8月18日、「八月十八日の政変」

長州軍は攘夷実行のため下関に集結して京都にはいなかった。その隙を狙って京都では薩摩藩兵と会津藩兵が公武合体派の公家と示し合わせて、三条実美ら尊攘派の公家ら（長州藩を含む）を追放したクーデター。攘夷運動の主体が長州藩から離れた画期的な出来事と言われている。

1864年8月5日～14日、四国（英仏蘭米）連合艦隊が下関を報復攻撃。

長州藩の砲台は徹底的に破壊され占領され敗北する。賠償金は幕府が300万ドル（当時の幕府予算の約3分の1に相当）を支払った。長州藩も軍事力の差を目の前にして「攘夷は不可能」と悟る。

「攘夷は不可能」で薩摩藩と長州藩は一致した。後に坂本龍馬の仲介によって薩長同盟の締結となり、共に倒幕へと向かう。その転換点となった。（外国によって目を覚まされた）

1864年8月20日、禁門の変

「八月十八日の政変」で京都を追放された長州藩が勢力回復を目指して上京、朝廷に嘆願したが拒否され、京都御所に発砲した。市街で大火も発生した。それを「朝敵」とされることになった。

1864年9月、第一次長州征討

西郷隆盛らが征討のため長州に向かう。長州藩が幕府側に恭順の意を示し戦闘なく終わる。

ここで長州藩の内部で対立が生じる。急進的な尊王攘夷派と幕府への恭順した保守派に分かれる。この藩内混乱をおさめたのが急進派の高杉晋作である。彼は武士だけでなく農民や町民も含めた身分を超えて、やる気がある者は軍人になれると言って自発的な軍隊を造った。奇兵隊という。長州藩の軍制を近代化し、倒幕に向けた力をつけて名誉挽回をはかった。ここで再び長州は尊皇攘夷派となる。

1865年11月、兵庫開港要求事件

イギリス フランス オランダの連合艦隊が兵庫沖に侵入し、軍事力を背景に安政五カ国条約（1858年締結済だが朝廷の許可はなかった）の勅許(天皇の許可)と兵庫(現在の神戸)の早期開港を幕府に迫った事件。1865年9月イギリスのパークス公使が主導し、英仏蘭の連合艦隊が兵庫沖に現れ、軍事力を背景に幕府に圧力をかけた。

1865年11月、横須賀製鉄所起工式

幕府はフランス政府の支援を受け入れて横須賀製鉄所の起工式を実施。

幕府はフランス寄りに、薩長はイギリス寄りになる。

1866年3月、薩長同盟が結ばれる。

仲介者は坂本龍馬。長州は薩摩経由でオランダから近代的な武器や船を入手できるようになった。犬猿の中であった二藩が倒幕を目的に手を組んだ歴史を動かす盟約となる。

1866年6月、第二次長州征討

薩長同盟を結んで倒幕の準備をしていると察知した幕府が「不屈な企て」をしているとして征討を開始した。しかし、14代将軍徳川家茂が脚気で病没（7月20日）した上に、高杉晋作らが率いる近代化された軍隊で敗北し、幕府の権威は完全に失墜し、倒幕への動きが加速した。実質的な終焉は8月7日の長州藩の猛攻によって、政治的力関係が逆転して終結した。（1867年1月初め）

7月20日から一橋慶喜が中心となって幕府の政治を執行する。その活躍ぶりは有名であるが兵庫開港要求事件に係る外国との交渉、朝廷との交渉、薩摩藩との対立等に奮闘した。

1867年1月10日 一橋慶喜15代将軍となる。

家茂の病没によって将軍後見職であった慶喜が将軍職に就かざるをえなかった。

慶喜はフランス公使ロッシュの支持を背景に軍制改革に着手したり、列強との関係の修復に力を入れた。

1867年、八戸事件・詳細は2月号へ

徳川慶喜が15代将軍になった1867年（慶應3年）1月10日から一週間後、清朝の広州で発刊された新聞に掲載された怪情報「八戸事件」。本稿はここから朝鮮国、清国、ロシアとの関係に入っていく。

1867年「ええじゃないか」民衆騒動

近畿・東海・四国などで起きた民衆騒動で、「天からお札が降る」という噂をきっかけに、人々が「ええじゃないか」と唱え、仮装して熱狂的に踊り練り歩き世直しを求める「お祭り騒ぎ」である。幕府の権威失墜と明治維新直前の不安定な世相を反映し、物価高や生活苦からくる不満が背景にあり、一部では富裕層への強奪も伴った。

1867年6月24日、一橋慶喜は兵庫港の開港を約束する。

一橋慶喜は英仏蘭からの兵庫開港催促要求され開港を約束した。しかし攘夷派の根強い公家らの反対にあい、勅許を得るのに困難をきたした。勅許を得たのは6月26日であった。開港は1868年1月1日である。この勅許の前に約束しがことをめぐって悶着があり朝廷側との駆け引きがあったが、その後の政局の転換点となった。

もはや誰の目にも開国はやむなし尊王攘夷は無理だと分かってきた。幕府を守って国難に対処しようとする佐幕派（幕府を補佐する。土佐藩、会津藩）が公議政体論出した。

この考え方に討幕派の薩長両藩は反発する。

公議政体論とは土佐藩坂本龍馬や後藤象二郎らが提案した。会議を開き、広く諸藩の意見を聞き、将軍（徳川慶喜）を議長に据え、天皇のもと諸藩が参加する形で幕府体制を存続させつつ、新しい国家を形成しようという考え方。表向きは幕府の独裁を終わらせ、天皇を中心とした統一国家を樹立するとした。

1867年11月9日、大政奉還を上奏、翌日11月10日勅許される。

上奏の内容要旨「私、慶喜は日本の現状をよく考えたところ、今までの習慣を改めて、預かっていた政権を天皇陛下にお返しします。広く人々の意見を取り入れ、天皇の判断を仰いでみんなと一緒にこの日本のために尽くしたいと思います。そうすれば必ず日本は世界に並び立つ強国となれるでしょう。」

徳川慶喜は辞めるとは言っていない。天皇政府の中に旧幕府勢力を埋め込もうとしたこの大政奉還では責任だけを天皇に押し付けて、実質は何も変わらない。幕府体制の秩序は温存されると薩長は「倒幕の密勅」を持って、幕府を倒してから天皇政府を作ろうと徳川慶喜の上奏に反対して企図する。

1868年1月9日、新政府（明治政府）の樹立

王政復古の大号令と小御所会議開催、

大号令の原案は討幕派の公家岩倉具視が、大久保利通、西郷隆盛らと連携して作成し朝廷を動かし、勅命をもって発出した。

王政復古の大号令の内容概要

- ①徳川慶喜は政権を天皇に返した。
- ②ペリー来航以来国家は苦しい状態に陥った。孝明天皇は大変悩んでいたのは周知のこと。
- ③そこで、明治天皇は天皇政治を復活し、失われた国威を回復するための基礎を定めた。
- ④摂政関白や幕府は認めない。（徳川慶喜の失脚の決定）
- ⑤総裁・議定・参与の三職を任命しそこで全てを処理することに決定した。
- ⑥すべては神武天皇の最初の時代に戻って、すべての人が公に論議して、天皇は国民と同じく喜び、悲しむという政治姿勢をとる。
- ⑦よって、すべての国民は良く努力して、今までのような、だらしない態度を洗い流して国ために中節を尽くすようにせよ。（五榜の掲示・資料添付）

その夜、京都御所において天皇の臨席のもと小御所会議（新政府第1回会議）が開かれ伝達された。

この会議では徳川慶喜の内大臣辞任(辞官)と徳川家の領地の一部返上(納地)が激論された。

倒幕派は徳川慶喜に「辞官納地」（徳川の領地400万石）の朝廷への即刻返納を求めた。慶喜は承諾し退席し大阪へ戻った。

しかし、親幕府諸藩ら（土佐藩山口容堂、越前藩松平春嶽）が激しく抗議し、会議は難航した。決着がつかず翌年の鳥羽伏見の戦いの原因となる。

「辞官納地」が実施されたのは1868年4月6日江戸城無血開城によって新政府軍に没収された。会議に参加した主なメンバーは下記の通り。

有栖川宮熾仁親王三条実美、岩倉具視、大久保利通、木戸孝允、後藤象二郎、西郷隆盛、山内豊信、後藤象二郎ら。討幕派と公議政体派が参加している。。

1868年1月、鳥羽・伏見の戦い。戊辰戦争を経て官軍が全国を平定

戦いは京都で始まり、1869年5月の箱館戦争(五稜郭の戦い)で終結した。新政府軍と旧幕府軍(主に奥羽越列藩同盟など)が戦った日本の内戦で、新政府軍の勝利に終わり、明治新政府による統一国家体制が確立した。この後、版籍奉還（1869年）廃藩置県、日清修好条規（1871年）琉球処分（1872年）と隣国との関係が複雑になって歴史が動いていく。

1868年4月14日、天皇は5箇条の御誓文を発する。

公家や大名たちの前で読み上げ先祖に誓った。口語訳は下記の通り。

「五箇条の御誓文」 意識(口語文)

一、広く人材を集めて会議を開き議論を行い、大切なことはすべて公正な意見によって決めましょう。

一、身分の上下を問わず、心を一つにして積極的に国を治め整えましょう。

一、文官や武官はいうまでもなく一般の国民も、それぞれ自分の職責を果たし、各自の志すところを達成できるように、人々に希望を失わせないことが肝要です。

一、これまでの悪い習慣をすてて、何ごとも普遍的な道理に基づいて行いましょう。

一、知識を世界に求めて天皇を中心とするうるわしい国柄や伝統を大切にして、大いに国を発展させましょう。

これより、わが国は未だかつてない大変革を行おうとするにあたり、私はみずから天地の神々や祖先に誓い、重大な決意のもとに国政に関するこの基本方針を定め、国民の生活を安定させる大道を確立しようとし

ているところです。皆さんもこの趣旨に基づいて心を合わせて努力して下さい。（以上、明治神宮ホームページより引用）

1868年4月14日、五榜の掲示、政府が民衆に向けた禁止令

- ①五倫道德遵守、②徒党強訴逃散禁止、③切支丹邪宗門嚴禁、④万国公法履行
- ⑤郷村脱走禁止

五倫とは

儒教（孔子が唱えた道德教理を体系化した学問内容）における人間関係を規律する五つの徳目

- ①君臣の儀・・・忠誠（君臣）は儀を重んじお互いを思いやる。
- ②父子の親・・・孝行 父子は親しみを持つ。
- ③夫婦の別・・・男女の役割 夫婦は互いに役割を持つ。
- ④長幼の序・・・上下の秩序 兄弟はお互いを愛し、敬って序(上下関係)を守る。
- ⑤朋友の信 盟友（硬い約束を結んだ友）は信じあう。

五倫五常というときの五常とは

仁・・・相手を思いやること。己に勝ち、他に対するいたわりのある心のこと。

義・・・利害を捨てて条理に従うこと。正しい行いを守ること。

礼 相手を敬うこと。礼儀、礼節を重んじること。

智 合理的な判断をすること。物の道理を知り正しい判断を下すこと。

信・・・真心があること。偽りのない忠実な誠の心。

五倫五常道德は、個人の道德性だけでなく、家族や社会における人間関係のあり方を規定し、儒教の倫理体系の根幹をなすもの。日本でも古くから道德教育の基礎として重視されてきた。

新政府は体制移行の中で社会が混乱し、強烈なインフレーションで民心定かならず、「ええじゃないか」運動をおさめるために政府は五榜の掲示をして国民精神の統一と秩序の確立を目指した。武士階級に浸透していた儒教道德、特に「五倫」に着目した。その狙いは次の通り。

- ①国民精神の統一と秩序の確立――バラバラになりがちな国民の意識を、儒教に基づく普遍的な道德観でまとめ上げ、社会秩序を維持しようとした。
 - ②天皇制国家体制の強化――「君臣の義」は、新しい天皇中心の中央集権国家体制において、国民が天皇や国家に対して忠誠を誓うための精神的基盤とした。
 - ③西洋列強に対抗するための国民道德の育成――欧米諸国に負けない強い国を作るためには、国家のために働き、時には犠牲を払うことも厭わない国民の育成。五倫道德は、こうした国民の義務感を育むのに適した。
 - ④教育の基盤――1872年(明治5年)の学制公布により近代的な学校制度が導入されて、教育を通じて国民にこれらの道德を浸透させることを企図した。
- 最終的に、これらの道德観は「教育勅語」へと発展的に継承され、戦前の日本の道德教育の核的な柱となっていった。

1871年9月（明治4年）9月13日、日清修好条規

清国と国交が樹立。日本が外国と結んだ最初の対等な条約。互いに外交使節と領事を駐在させ相互の領事裁判権を認めた。冊報関係にあった朝鮮が驚いた。

日清戦争の下関条約（1895年）は破棄され日本に有利な不平等条約に変わった。

あとがき

近現代史の挑戦の初めにロシアの南下政策と日本の幕末・明治維新までの概略を中心に記してきました。

「人間はなぜ戦争をするのか」「人間はなぜ戦争をするようになるのか」今、私たちはその答えに直面してテレビを見ています。多くの人は悲しみを持って。

17年前（2009年）に「それでも日本人は『戦争』を選んだ」と加藤陽子さんの本が出版され、今は初版32刷になっています。かなりの人がこの問題に関心を持ち続けています。若い人にこの問題を持ち続けてほしいと思い、そのための基礎知識を書いています。

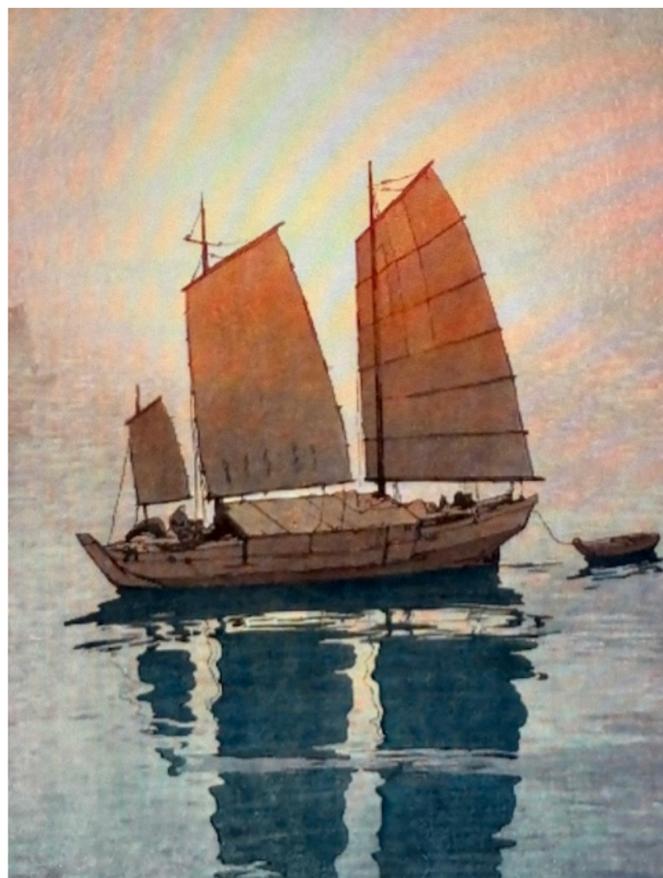
私は50歳の時から交流分析という学問を深く学び、「人は同じことをなぜ繰り返すか」との問いには答えを得ました。しかし、「なぜ人間は戦争を繰り返すのか」の答えを得ていません。答えを得ている人もいるはずですが、発表されていないか無視されているかです。だから戦争はくり返えされるのだと思います。無言でいいから、その人なりの答えを持って貰いたいと願っています。

私は最近「民意」に関心を持つようになりました。一人ひとりの一票は何の力もないと思いつながりながら投票には行く。国民の最低の義務と権利がコインの表裏のようになった一票だから尊いのだと思う。結果は大概失望に終わる。民意に負けたのである。民意が好戦的になれば政治家は戦争をやめることに躊躇する。終わらせる大義を作らねければならない。開戦の時はどうか。80年間戦争をしなかった誇れる国ですから、歴史を学ばない限り、答えは出ないでしょう。これからも開戦のない国であって欲しいと願っています。

議会の解散権が総理大臣の専権事項とは憲法には書いていない。二つの条文を掛け合わせて解釈したものだといいます。大義なき人に大義を求めるのは無理かも知れませんが、虚しいと思っても一票は投じたいです。賢い一票になって欲しいと願いながら。

今回の解散については多くの国民が「何かおかしい」と思っています。高市ゲームであって人気投票を700億円以上かけ、国民は振り回されて混乱させられて、結果高市に投票するとうように仕向ける巧みな仕掛けであるように思われます。しかし、国民を巻き込んだ壮大な高市劇場の人生脚本ドラマが展開されます。

(→吉田 博氏 木版画 MOA美術館)



パリ通信・第169号

ザッキン美術館「ザッキン〜アール・デコ」展

1925年パリ万国博覧会(現代装飾美術産業博覧会、通称アール・デコ博覧会)から百年が経つ。第一次世界大戦の影響により開催が延期されてきた万博で1925年4月から11月に実現した。過去の伝統から解き放たれた現代フランスのアール・デコ(装飾美術)を推進する芸術産業イベントで、ヨーロッパを中心に21ヶ国が出展、1600万の入場者数を誇った。

パリ・アレキサンダー3世橋からアンヴァリッド、グラン・パレとプチ・パレ、セーヌ川沿いに150のパビリオンが立ち並び大成功を納め、「アール・デコ様式」を世界中に知らしめたのである。アンドレ・グルー、ピエール・シャロー、ル・コルビュジエ、ロベール・マレ・ステヴァンスと言った錚々たるインテリア・デザイナーや建築家たちがパビリオンを手掛け、彫刻家ポンポン、ザッキンらも動員された。アール・デコ博覧会百周年を記念してザッキン美術館では「ザッキン〜アール・デコ」展(2025年11月15日から2026年4月12日まで)が開催されている。

ザッキン美術館はパリ・リュクサンブール公園の南、6区アサス通り(100 bis, Rue d'Assas)にある。ザッキンとその妻ヴァランティエヌの住まい兼アトリエだった場所で、庭にはザッキンのブロンズ像が配されている。オシップ・ザッキン(1888-1967)は1888年ロシア・ヴィテブスク(今のビエロルシ)に生まれ、イギリスで芸術を学んだ後、1910年からパリに住み1921年フランス国籍を取得する。



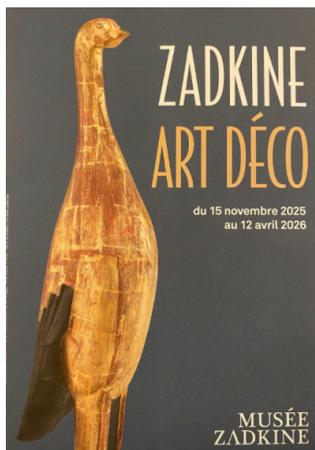
ユダヤ人であったが故に第二次世界大戦中はニューヨークに亡命。キュビズムに位置付けられるザッキンだが、同時代のアイリーン・グレイ(1878-1976)とアンドレ・グルー(1884-1966)との関係を紹介しながら、1920-1930年アール・デコ芸術に深く貢献していたことに注目したのが今回の展示である。

アイルランド生まれのアイリーン・グレイは1906年からパリに住み、漆工芸の手法を日本人菅原精造に学んでいる。アール・ヌーボーの有機的デザインを経て、より単純化された直線や幾何学を使ったシンプルなフォルムに移行するのがアール・デコで、トータル・インテリアとしての家具や調度品の洗練された「素材」が重要な要素

となり、漆という東洋の新しい「素材」を取り入れたのである。

アイリーン・グレイは1922年パリにギャラリーを開き、インテリア・デザイナーとして自身の家具や椅子、絨毯などを展示すると共に、ザッキンの彫刻も置いていた。画家藤田嗣治を介してアイリーンはザッキンと知り合い、ザッキンの作品を購入し、交友関係は生涯に渡る。また、ヴァランティエヌとの結婚の証人でもある藤田を介してザッキンは日本の二科会にも海外出展する。1923年からは彫刻を出品し、大正・昭和前期だけでなく、戦後においても日本の芸術家たちをパリに受け入れ、大きな影響を与えている。

1920年代後半、フランス・アール・デコにおける重要なインテリア・デザイナーと見なされていたのがアンドレ・グローで、モード界で活躍する妻ニコル・グローと共に当時のパリを牽引していた。高貴な素材を用いて、シンプルで荘厳なフォルムによるインテリア構成は、高級ホテルや裕福な個人邸宅など、ピュアで豪華な空間を創造し、その装飾性は高く評価された。グローとザッキンのコラボレーションは1926年に始まる。パリ・パッシーに建設中の「マイヤン邸」の内装を担当するグローがザッキンに外壁の装飾を依頼した。素材にこだわる二人の協力関係は良好で、ザッキンはニコルのブロンズ像も残している。



展覧会の広告画像としてアール・デコ期のザッキンを代表する作品としてメインに据えられたのが「金の鳥」(1924年)(石膏に彩色と金箔)(98x20x23 cm)である。浄化された線と幾何学的なフォルム、石膏に赤い彩色を施し、四角い金箔と黒い尾が装飾性を強調している。

百年経った今でもフランス・アール・デコはその魅力を失っていない。ザッキン、藤田、ピカソなどエコール・ド・パ

リ派と称される外国人芸術家と彼らを取り巻く人々がパリで切磋琢磨しながら芸術を牽引していた時代から学ぶことは今なお大きいと思う。

(古

賀順子記)

编者注

菅原精造について調べようとしたが精査はできませんでした。

私にわかったことは彼は1884年(明治17年)1月29日生まれ、1905年11月17日横浜港より渡仏、1937年4月12日。本稿に記載があるようにアイリーン・グレイ(1878-1976)とアンドレ・グルー(1884-1966)に日本の漆技を教えている事実は外国文献にある。



参考図書紹介

菅原精造 《フランス工芸界に多大な影響を与えた幻の巨匠》

明治38年渡仏、生涯を異国の地で漆工芸の発展に尽くした「幻の巨匠」。

その謎の生涯と業績を元フジTVパリ支局長が執念の調査で再現。

フランスの漆工芸に多大な影響を与え、今なおその業績が語り継がれていながら、日本ではほとんど忘れ去られた「幻の巨匠」がいる。

菅原精造――。本書は元フジテレビのパリ支局長だった著者が、ふとしたきっかけでその名を知り、二十年の歳月をかけて生涯をたどった異色の評伝である。

一八八四(明治十七)年山形県の酒田に生まれ、十七歳のときに上京し、東京美術学校の漆工科撰科に入学。日露戦争が終結した一九〇五年晩秋、二十一歳で横浜からフランスへ出航、その後一度も帰国せず、生涯をパリ中心に過ごした。

菅原は渡仏後すぐ、工芸の道を志し、ロンドンからパリに戻ったアイリーン・グレイとの知遇を得、彼女と共同制作した「夜の魔術師」をサロンに初出品、評判を呼ぶなど、次第に漆芸家としての地歩を固めていく。

著者は数少ない手がかりをもとに、ついに遺族の存在を突きとめ対面、遺された作品はないとの定説を覆して数点の遺品と対面する。菅原はパリで何を目ざしたのか。藤田嗣治をはじめ、数多くのパリ在住の日本人との交流を中心に、著者は執念の調査で描き出していく。

藤田嗣治について

湯原かの子 新潮社(2006年)

藤田の評伝です。日本の妻に宛てた手紙、第一次世界大戦、エコール・ド・パリ、戦争画など資料にもとに藤田の生涯を辿っています。

